

医療福祉ジャーナリズム特論 大熊由紀子教授
老化に伴う衰えをプラスに変える
4B11046 浅野泰世

様々な声が飛び交う中で相手の声を聞き分けるのが難しく、一度は聞きかえしてみたものの聞きとれず、その後話が全く理解できなくなったにもかかわらず相槌を打ち続けた、講義を聞かせていたく前の日に私がしたことです。解らなければ何度でも聞きかえすことが許される人間関係はむしろ稀であり、聞こえたふりをしてその場の空気を壊さないことの方がむしろ人付き合いの作法にかなっていると思っていました。

先生は講義の中で、「難聴の特徴は『関係性』の障がいであること」だとお話してくださいました。昨日の場面を思い浮かべ、その言葉は重く響きました。ここ1、2年似たようなことをする頻度が急に増えているように感じていました。私と話をする人が分かったふりをしていただけだとどこかで気づいたら、相手は私と話をする気持ちを持たなくなるでしょう。このようにして私は、しだいに人と人が関わる中で成長する機会を失ってしまうかもしれないと思ったのです。

講義の中で、聴覚障害者人口について、いくつかの数字をご紹介いただきました。その中の一つが34万人、これは身体障害者福祉法の聴覚障害者の数だというお話でした。厚労省に認定基準をWHOの基準に合わせ引き下げるべきと主張すると、バランスの問題すなわち障害者の中で聴覚障害者の割合が高くなってしまふ、障がいの保障に財源がかかるという理由で退けるともお話してくださいました。障がい者を、社会の手助けが必要な特別な人々と見做す、旧来の障がい者福祉の考え方では、このような話になるのでしょうか。

これに対し、600万人、1994年の朝日新聞の社説に書かれ聴覚障害者の数は、障がいを他

人事ではなく自分たちの問題としてとらえ、障がいの多くは社会が変わることによって克服でき、克服するのは私たち全てを含む社会の責任であるという、今日の障がい者福祉の考え方に基づいて導き出されたものでした。20年の歳月で、私たちはこのような考え方を本当に自分のものに出来たのでしょうか。

佐村河内氏事件によって、周囲の理解や手助けを「頭を下げて」求めながら、苦勞をして生活し仕事をしている「難聴者は身の置き所がない」状態に陥られたというお話しがありました。ゴーストライターの作品を自分のものとして発表するというルール違反の話が、彼が難聴者であったことに焦点が当てられて報道され、ついには、「難聴の詐称」、障害者手帳の不正取得の問題にすり替わってゆき、そこに一般の難聴者が巻き込まれてしまったのはなぜだったのでしょ。それは、私たちの多くが、障がい者福祉についての旧態依然たる考え方を捨て去ることが出来ていなかったからではないでしょうか。

先生は講義の最後に、「自覚的難聴者として「難聴者のプロ」として」の在り方をお示くださいました。そこに述べられていることは、人と人とが関係性の中で互いを高めあって生きる術、多様な人々が互いを尊重しあって暮らす社会に連なる道、高い人権意識であると感じました。難聴という「回りにわかりにくい障害をもちながら社会の中で生きることが」このような生き方や考え方ができるように人を成長させるのでしょうか。

先生のお話を伺い、悲觀的にとらえていた老化による聴力の衰えは、障がいを自分のこととして受け止めるチャンスであり、人として成長する機会であると感じることが出来ました。素晴らしいお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。